



Title	フィヒテ論攷：フィヒテ知識学の歴史的原理的展開
Author(s)	本田, 敏雄
Citation	大阪大学, 2001, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/42214">https://hdl.handle.net/11094/42214</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed</a> 大阪大学の博士論文について

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名 ほん だ とし お  
 博士の専攻分野の名称 博士(文学)  
 学位記番号 第15903号  
 学位授与年月日 平成13年3月23日  
 学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当  
 文学研究科文化形態論専攻  
 学位論文名 フィヒテ論攷  
 一フィヒテ知識学の歴史的原理的展開—  
 論文審査委員 (主査)  
 教授 溝口 宏平  
 (副査)  
 教授 里見 軍之 助教授 入江 幸男  
 (審査協力者)  
 浄土真宗教学研究所所長・大阪大学名誉教授 大峯 顯

### 論文内容の要旨

本論文の主題は、18世紀末から19世紀前半にかけて活躍した、ドイツ觀念論を代表するひとりであるJ.W.フィヒテの知識学の前期から後期にいたる思想展開を、テクストの詳細な分析と解釈を通して追構成し、全体を一貫した知識学の根本モティーフのもとで捉え直そうとする試みにある。内容上の特色としては、前期から後期への移行を、フィヒテ知識学の中心概念が「働き」から「見る」へ移行している点に求め、その内的な変遷の必然性を明確にした点、及び後期知識学理解の核となる絶対知と絶対者との関係を「生成」の観点から捉え、同時にこの「生成」概念をフィヒテに従い哲学上の方法概念としても理解し追遂行しようとした点を挙げることができよう。また、本論文の採用する方法論についていえば、上記の「生成」概念に基づくフィヒテ哲学全体の追構成、言い換えればフィヒテの要求する「内的直観の自由の能力」に基づく主体的な思惟の追遂行という比較的オーソドックスな方法が採用されている。このような方法論上の帰結として、申請者の結論ないし主張がフィヒテ哲学の現代における復権ないし再興に求められるのも、それなりに首尾一貫したものと認められる。

本論文の構成は、全体が2篇(第1篇:1~5章、第2篇:6~8章)から成る全8章立てに序言、注及び文献一覧から成り立っており、A4版164頁、400字詰原稿用紙換算約492枚より成るものである。

第1篇では、フィヒテの前期知識学を代表する作品『全知識学の基礎』にみられる思想を中心に、第1章では「行事」の根本性格及び学の円環構造の解明、第2章では知識学における「叙述」の意義と役割の解明(ここでは同時に前期の「働き」の立場から後期の「見る」の立場への移行が予描される)、第3章では後期への移行理解の鍵としての「信仰」概念の解明、第4章では学全体を支える「明証性」の性格と意義とを明らかにし、さらに第5章ではヘーゲルによるフィヒテ批判に対する再批判を通して後期思想への道を際立たせる試みがなされている。続く第2篇では、1801年及び1804年の後期知識学の作品を中心に、第6章では、「見る」を後期知識学の基本原理として捉え、その概念が前期の「知的直観」の概念から始まるものであり、1801年の知識学で「眼」の概念として発展していく過程が詳述される。第7章及び第8章では、後期知識学にみられる絶対知と絶対者との関係のもつ不分明さの解明が、「知的直観」、「眼」及び「光」の概念を手引きに試みられ、その結果、後期知識学における哲学的知の営みが、生きることによって体得される知の覚醒として結論づけられることになる。

## 論文審査の結果の要旨

本論文の特質は、詳細で誠実な文献解読の努力と並んで、伝統的でオーソドックスな手法ではあるが、主体的な追思考を通して、事柄そのものの内的本質からテクスト及び哲学自体の意味を再構成しようとする点にある。そのため、近年進展をみせるフィヒテ研究の動向と比較した場合、フィヒテ哲学の移行の問題を取り上げるに際してのテクスト選択及び解釈技法の上で若干方向が異なる点がある。このこと自体は、本論文の欠陥というより、むしろ解釈上の立場の相違と考えるべきであるが、他の解釈の可能性に対してより綿密に検討を加えること、及び今回取り扱っていないフィヒテの原典テクストについても詳細な批判的検討を加えることが今後の課題とされよう。しかし、こうした問題点にもかかわらず、極めて理解の困難なフィヒテ哲学の展開の内的構造と原理を解き明かそうとした申請者の努力と成果は高く評価されてよい。

以上のような評価及び問題点を考慮した結果、本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に相応しいものと認定するものである。